自己形成の物語と世代継承の物語の間

――「ビルドゥングスロマンを読む会」の40年から考える ――

宮 澤 康 人

研究室紀要 第43号 別刷
東京大学大学院教育学研究科　基礎教育学研究室
2017年 7 月

自己形成の物語と世代継承の物語の間

――「ビルドゥングスロマンを読む会」の40年から考える――

宮　澤　康　人

このところ、自己形成と人類史、あるいは個体発生と系統進化、の関連付けを主題にして読んだり考えたりしています。今回はこの主題を別の角度から、焦点をしぼって扱ってみたいと思います。それは、自己形成の物語であるBildungsromanを、人類の精神史の大きな文脈（＝歴史哲学）において捉えようとすることです。

1　ビルドゥングスロマン（自己形成小説）の出現

Bildungsromanは、ふつう「教養小説」と呼ばれています。時に「教育小説」とも訳されますが、「自己形成小説」とするのが適訳と思います。自我を至上価値とする西洋近代社会における自己形成の物語表現だからです。これは、近代の人間形成目標を、単に概念としてはなく、生きた人間の声と行動の文字記述として読むことができる貴重な素材です。

ビルドゥングスロマン（以下B.ロマンと略称）を読む会は、大学院の、私の「教育関係史論」ゼミのサブゼミの形で、「大人と子供の関係史」の研究会と並行して始められました。＜関係＞というカテゴリーにしつこくこだわって、西洋近代の教育史の全体像を、マクロかつミクロに認識しようとする企図の一端を担うものでした。

これに加えて、同じ企図の延長上に、「共同体の歴史社会科学」と「エコロジー・アンティヒューマニズム・教育を考える会」という二つの研究会も発足しています。前者は、当時(そして多分今に至るも)、教育の史・哲的研究の、とくに巨視的歴史認識に必要でありながら、致命的に不足していると私が感じた社会科学の（とりわけ社会経済史的）知識と方法論を学ぶためのものです。後者は、人類社会の外部に目を向けない、まるで外部が存在しないかのような問題設定を平気でする人文学的（ユマニスム的）教育学に対応して、その“自然哲学の貧困”を批判を志すものです（この点については参照；拙稿「世代を貫く生命の絆と教育学イデオロギー――身体＝環境系の系統発生と個体発生という視点から」「エコロジー・ポストモダニズム・環境＝身体系の教養―＜自然＞主義の再考をめぐる読書ノートから研究動向へ」、いずれも研究室紀要論文)即ち、教育研究内部に、自然環境と人間との代謝・交換関係を重要不可欠なテーマとして正当に位置づけようとするものです。両者とも、その後、中断もしくは開店休業状態です。なぜ、他の研究会のように持続できなかったのか、機会を改めて反省を込めて詳しく紹介し、問題提起したいと考えています。

「B.ロマンをよむ会」は、私の、在外研究による中断をはさんで、現在も続いています（本紀要の別稿(「研究会動向」を参照)。このうち、第一期(1978-1981）についてはすでに「共同体・Bildungsroman・教育史の課題」と題して、『研究室紀要』第６号（1980）に書きました（拙著『大人と子供の関係史の方へ』に再録)。それゆえ今回は、第二期以降のことを書きます。

B.ロマンの文学としての特徴は、まず詩とか演劇など他のジャンルと対比すると明瞭です。詩が韻を踏んで謳われるのに対して、B.ロマンは小説一般と同じく散文で書かれています。また演劇では、すでに出来上がった性格の主人公が登場し、その性格が一つの要因となってドラマが繰り広げられるのに対して、B.ロマンでは、主人公の性格そのものの形成過程が描かれることが特徴的です。

B.ロマンは、文学の一ジャンルである小説（ロマン、ノヴェル）の、さらに下位のジャンルです。その小説について、かつて文学者の中村光夫は、「芸術全体のなかで、一番芸術らしくない芸術」(中村、８）と特徴づけをした上で、「散文で書かれた物語」（中村、13）と定義しました。ここには、事実の記録である歴史と違うこと、韻文で朗誦される詩と違うこと、上演され視聴覚に訴える演劇と違うこと、そし

て、概念言語で語り記述する哲学とは違うこと、たとえ「芸術らしくない」とはいえ、「芸術」である、ということが指摘されています。これは今でも通用する指摘です。

2　なにをどう読めたか

それでは、これまでにどんな作品を読んできたかといいますと、本稿末尾の別表にリストがあります。

このリストは、作品の選択基準の曖昧さ、読む順序の系統性のなさ、会の迷走ぶりを如実に現しています。読むことの方法論、とりわけ他者とともに物語を読み合う方法論への自覚が足りなかったことを今更ながら痛感します。

第II期に入った最初のうちこそ、自己形成過程への関心という初志に従って、マンとかヘッセの作品、バフチンの教養小説論などを取り上げていましたが、次第に、教育史・教育哲学専攻の参加者はいなくなり、代わって現象学的心理学や社会学や精神医学やアメリカ文学の人、のちには看護学や国文学の人も加わって、関心が人間論・物語論一般へと広がっていきます。その結果、旧約聖書や、クルアーン、論語、さらには、万葉集、源氏物語にまで手を伸ばすことになりました。

なぜ、そのようになったか。理由は、史・哲からの参加者が減少するにつれ、宮澤の専門領域（西洋教育史）や近代の人間形成というテーマへの拘りが消え、テクスト選択の基準が広がったことにあります。

最初の画期は、ダンテの『神聖喜劇』（『神曲』）を取りあげたときです。第二期の19番目にあたります。ここから、近代の市民社会に成立したはずのB.ロマンの枠を超え、近代という時代と、小説というジャンルの二つの制約がはずれました。ただしダンテの重要性は、後に述べるように、このことにつきません。

次の画期は、II期の53番目に旧・新約聖書を取り上げた時だったでしょう。これによって、近代と小説という枠はもとより、自伝的要素をもつ個の内面の物語であること、さらにいわゆる文学作品であることの枠さえも超えたと言えます。その挙句、古典的作品すべてが候補になるという広がり、というか拡散が生じました。

とはいえ、全体を通して、参加者に共通して強く印象づけられた作品はあります。以下、それを挙げてみます（私見に基づくことは言うまでもありません）。

やはりゲーテとドストエフスキーが、様々な点で対照的ではあれ、大方の人間論的関心に応えたことは間違いありません。前者の、外部世界に向けられる闊達な視力（まさしく「眼の人」といわれるゲーテ）には魅せられました。後者の、人間の内面に深く沈潜するとともに、多様な登場人物が存在感をもってそれぞれ生々しい声を発するポリフォニックな世界には圧倒されました。それで、二人の長編作品をほぼすべて読み進む結果になりました。

カフカも、リアルな日常が同時に、まるで悪夢の中の出来事であるかのような不可解な感覚で、更なる作品を読む欲望を誘いました。

アメリカ文学専門家の勧めで、ためらいながら取り上げたメルヴィルの『白鯨』は、予想外の面白さでした。海や鯨の生態、捕鯨船の内部についてマニュアックともいえる描写が続くにも拘わらず、読み続けずにはいられない、どうしてこうも惹き付けるのか何度考えてもよく分からない不思議な作品です。

衝撃的だったのはヘンリー・ミラーの『南回帰線』でした。タブーを無視したあからさまな性行為の描写は、共感より嫌悪の念を催させるほどでしたが、そういう受け取り方自体がたぶんミラーに言わせれば、教養ある俗物の感覚なのでしょう。

私が再発見したのはヘッセです。メルヒェンめいた、感傷的な少年小説作者と思い込まされていましたが、『ガラス玉演戯』には、神秘的ともいえる深い精神世界が展開されていました。『デミアン』は長編ではありませんが、それだけに一層、思春期の少年の内面のドラマが凝縮されていて、何度も読み返したくなる物語です。鈴木聡さんなどは、これを使って、青年期について連続三回の講義ができた、というほど内容豊かな作品です。

物語としての面白さに魅了されたのは、月並みですがディケンズとバルザックです。これを機に同じ作家の他の作品にも手を伸ばした人が私以外にもいたはずです。

フローベールの『ボヴァリー』は私には三度目でしたが、読むたびに面白さが増したという印象です。ところが、これ以外の作品がひどくつまらなかったことは、バルザックらと対照的です。『感情教育』などはB.ロマンそのものであるような小説であり、

éducationの意味も英語圏とは違っています。ちなみにラルースの哲学事典には「教養」という用語は索引にさえありません。B.ロマンは厳密に言えばドイツにしかないと言いたがるゲルマニスト哲学者、文学者の言い分がわかります。これは、比較思想史的観点からも興味深いテーマですが、さらに、B.ロマンそのものに、小説本来の自由さからくる面白さや、善悪の彼岸にさえ向う文学的価値を損なう制約的要素が内包されていることを示唆するものではないでしょうか。この問題は熟考に値します。

ホメロスは古典の代名詞ですが、『オデュッセイア』には期待ほどの古典的風格を感じとれませんでした。昔読んだリライトものの方が魅力的だったとみな感じたようです。出来事の記述も人物描写も『イリアス』のほうがはるかに格調高く迫力があります。同じホメロスの作品とは受け取れない、という感を強くしました。

『蠅の王』は、少年集団だけが孤島で繰り広げる特異な物語でしたが、人間把握の底の浅さが透けて見える感じで、ノーベル賞受賞作といってもこの程度かといった、失望というより、傲慢な軽侮の念さえ抱かせる作品でした。

評価がいちばん極端に分かれたのは『嵐が丘』です。どの登場人物にも感情移入できなかった。感情の変化の描き方が不自然で納得できない、という感想がある一方、いや、人間の情念の理不尽なドラマに強い感銘を受けたという感想が対立しました。宮澤は後者でした。

『チボー家の人々』の評価にも大きなずれが現れました。そこには、世代の違いに起因する経験と感性の違いが関係しているかもしれません。実は『チボー』は、宮澤にとっては、高校二年、大学三年、大学院D2の時に続く四度目の読みとなる愛読書のひとつでしたが、またもや第一巻「灰色のノート」を一気に読了したのち、続きも夢中で読みました。しかも、二度目までは、飛ばし読み、三度目にもやや辛抱して読み通した覚えのある、「1914年夏」（第一次大戦の勃発に至る叙事史的記述、分量も全体の五分の三を占める）も食い入るように読めました。ところが、私より、20～30歳年下の人たちには、物語が多岐にわたるようでいて描写が平板でしかもくどい。女性のセクシュアリティ理解が旧弊のままである、といった印象を与えたようです。そういえば私自身も、今回は、これが19世紀的なスタイルの小説であることをあらためて感じましたし、副主人公の死に至る内面を描写したエピローグの部分などは確かにくどいと思いました。

群を抜いて読み応えがあったのは旧約聖書です。残酷さむき出しの戦争の叙事詩と、多様な人間の謎に満ちた心のドラマが交錯する物語の密度は圧倒的でした。異質な二様のカミが混在しているかのような感じをうけました。

それと対極的だったとも言えるのは、『失われた時を求めて』の読み応えです。執拗なまでの心理描写についていくのは大変でした。

『ユリシーズ』も、章ごとに文体も語り手の視点も変えるという前代未聞の実験に貫かれていて、一文ごとに惹きつけられて読み進んだテクストでした。ただ、19世紀の小説とは全く別のこの魅力は、どう評価してよいのやら分からないままです。

読むのに、思いがけず難渋したのは、『コーラン（クルアーン）』でした。正直なところ、私のそれまでの（そしてそれ以後も）読書体験の中で、これほど読みにくかったものはなかったと思います。内容や表現が特に難解なわけではなく、普通の人々のありふれた生活の中の出来事が分かりやすく語られているだけです。ムハンマドが加える預言的意味づけも別に難解というわけではありません。アラビア語のリズムやトーンの魅力を感受する能力はありませんが、ただ、ほとんど同じ物語が、これでもかというほど繰り返し語られるので、これを暗唱するには大変な忍耐力がいるだろうと想像します。これは単にイスラーム信仰の外部にいる者の感覚なのでしょうか。

クルアーン、ニーチェ、カフカを読んだあたりから、自己形成テーマにも、西洋流の物語性にもこだわらず、東洋や日本の古典も読みたいという意向が現れてきました。仏典や中国古典もしばしば候補にあがりました。『西遊記』も、三蔵法師が長い道中の数々の試練を経て、最後に、求める悟りの経典を獲得するに至るという点では、一種のB.ロマンではないか、何よりも、西洋的リアリズムの枠に捉われていては思いも及ばぬ（『ドン・キホーテ』などをはるかに超える）波瀾万丈、奇想天外の物語を愉しみたい、という提案もありました。

ただ私自身は、日本文学、それも西洋近代文学の影響を受けたのちの明治以後の作品に、B.ロマン的要素がどのように見出せるか、それといわゆる日本独自といわれる「私小説」とは、自己の捉え方にお

いてどう違うか、という問題にむしろ関心を寄せていたこともあり、また、やはり会の初心に戻って、人間の形成過程を中心主題にした作品に焦点を戻したいという気持ちが強くなっていましたので、次のような、<日本文化・教養>論再考とでもいえるプランを提案しました。

それは、加藤周一の『日本文学史』がしつらえた、歴史的文脈にしたがって、作品を選び、読み、そこから翻って、加藤の文脈自体と、<日本文化・教養>の認識の仕方も検討しようという欲張ったものでした。それが80番目以降に、もちろん不十分ながら具体化しますが、結果としては、高校教科書でお馴染みの代表的古典を通り一遍に読んだだけで、明治以降の作品はまだほんのわずかしか読めていません。それも、戦後の作品ばかりです。今後の方向については、今回の紀要掲載の別稿「研究会動向」に譲ります。

以上、個別テクストに触れたコメントを摘記しましたが、振り返って、私たちの読みは、現代批評理論の出現以前のスタイルだったことを痛感します。イーグルトンに言わせるならば、人生論的印象批評です(イーグルトン)。これでは19世紀的小説しか面白く読めないのかもしれません。ここで、では現代批評理論と物語の教育学的読みの接点はどう設定できるかという、新しい難問も生じます。

それはさておき、B.ロマンを、たとえ教育史の狭い窓口からにせよ、まともに論じるには、小説論、物語論を参照しながら、自伝的要素をもつ物語の比較史を展望しなくてはならないでしょう。その備えは私にはありません。若い有為な研究者が受け継いでくれるように願いながら、ノートを続けることにします。

3　学会発表と反応

「B.ロマンを読む会」の問題に立ち返ると、2015年の教育哲学会において、私は、「ビルドゥングスロマンと教育学の対立と交錯」と題して、次のような項目に従って発表をしました。「前置き（Ⅰ)」は省略して、要旨は以下のとおりです。

(Ⅱ) B.ロマンの概念と外延

B.ロマンの代表的な作品は、ゲーテの『ウィルヘルム・マイスターの修業時代』とされています。即ちドイツ18世紀末に確立したジャンルということです。

但し定義次第で、作品の外延は古今東西に広がります。ルソーの『エミール』はもとより、ヘーゲルの『精神現象学』をここに加える研究もあります。日本でいうなら、下村胡人の『次郎物語』とか吉川英治の『宮本武蔵』などもこれにあたります。

それとは反対に、ドイツ文学に特有のジャンルと限定する考えもあります。それによると、例えばアメリカ合衆国にはB.ロマンはない、何故なら、アメリカ文学には精神的「成熟」という思想がない、アメリカ文化は永遠に未成熟な文化だからというのです。たしかに、『ハックルベリーフィンの冒険』のハックは、市民へと成熟し損なう人間です。ところがメルヴィルの『ピエール』は、まがりなりにも青年期の経験と成長の物語です。さらにフランスにも、フローベールの『感情教育』というのがあります。イギリスの『デヴィッド・カパーフィールド』などはどう見ても典型的なB.ロマンです。加えてイギリスでは何故か、B.ロマンの研究がドイツに劣らず盛んで、このジャンルは、Bildungsromanとドイツ語で表記され、そのままOEDにおいて外来英語と認められています。

その原型は、16世紀末にスペインに現れた「ピカレスク」(「悪童小説」) と称する作品群とされます。これは、若い主人公が世間の荒波にもまれて次第に賢くなり、ひとかどの「悪者」に成長して、お偉方を騙し嘲笑う物語です。つまり、下積みの若者の鬱積した不満のはけ口になると同時に、若者に世渡りの知恵を授ける効用を発揮した物語です。そのためよく読まれたようです。その効用を洗練したところにB.ロマンが成立したとも言えます。B.ロマンを読むことは先達の人生を、文字を通して擬似追体験することでした。

現代では、時代小説やヤングノヴェルなどのジャンルが若者から中高年の人生相談の機能を果たしていますが、いわゆる純文学の領域ではB.ロマンは衰退していると言われます。

(Ⅲ) B.ロマンと近代教育学の相違と相似
—『エミール』との対比

B.ロマンの特徴は、教育思想の古典『エミール』と対比すると見えやすくなります。(中略。以下箇条書き)。

両者の相違　1）青年期以前を軽視するか否か。B.ロマンは青年期中心、『エミール』は少年期にも多くのスペース。教育学は学校と少年期に視野を狭めたため、20世紀半ばまで「小学校教育学」と批判された。

2）語り手設定の仕方及び虚構性の違い。物語論的構造の違いがあるのではないか（説明省略、要検討）。

両者の相似　1）パーソナルな関係だけを記述対象とする。マクロな政治社会が舞台にならない。それゆえ権力的社会関係が描かれない。

2）主人公一代限りの人生が主題。世代を超えた社会の歴史は捨象される。

3）国民社会内の内向きの人間形成。国民（言語共同体）教養を自明の前提とする（コスモポリタン形成は例外）。

4）人生の前半（成人となるまで）しか扱わない。まして誕生前と死後の世界、魂の転生など問題外。

5）精神形成のみを主題化。身体発達の側面の軽視。これは、現今に至るまでの体育学と教育学の離反に照応する。

（Ⅳ）B.ロマン解読のための、文学研究における、枠組みの工夫― 3 つの試練（ordeal）という視点

1）fatherの試練；主人公は、父親との葛藤を通して自分なりの人生観を確立する。

2）womenの試練；異性との出会いを経て性的アイデンティティーを獲得する。

3）moneyの試練；経済的自立を求めて職業選択をする。

こういった、青年期特有ともいえる試練がどの作品にも見られる。それへの対し方に注目して、作品の思想を解釈するという方法です。

しかしこの枠組みは、1）男性主人公を自明とする（女性には青年期葛藤はない、という心理学的俗説に従っている）、2）試練には、＜母の試練＞＜友人の試練＞＜知識の試練＞などもありうることを見落としている。

（Ⅴ）B.ロマンの変容と教育学の変容の照応

共同体からの個の解放の両義性、及び自己形成目標の混迷において両者は共通する。

混迷を経て、B.ロマンの代表作は、市民社会の疎外された人間を描く「芸術家小説」へと傾斜していく。さらに、『悪霊』など「反B.ロマン」作品さえ現れる。これは、教育目的論の個人化、自閉化、他律化、そして挫折に照応するのではないか。

（Ⅵ）結びと課題

B.ロマンと教育学は対立的であるにも拘わらず、個の自己実現願望の根強さにおいて共通する。その根底にB.ロマン的テーマの近・現代社会における普遍性を見ることができる。それゆえ、B.ロマンと教育の比較文化史研究にはアクチュアリティーがある。

なお課題として、

1）なぜB.ロマンと教育学の間に無視と敵対の構図が出現したのか

2）読むだけで成熟できたのか［→読まれ方、読み方の効果を検討する必要］書き手は成熟したのか［読む教養と書く教養の間］

以上の発表に対して次のような質問・意見（“”内）がありました。それに対する、後からの私の意見も併せて記します。

1）“B.ロマンと教育学を対立的に見るのは先入観にとらわれているからではないか”。これは発表への誤解だと思いました。表題でも「対立と交錯」を掲げていますし、両者の「相違」と共に「相似」について5点にわたって指摘しています。ただ「対立と交錯」の問題には、当初想定した以上に深刻な論点が潜んでいることに後から気付きます（後述）。

2）“「小学校教育学」という批判は当たらない。エミールでも青年期が重視されている。近代教育学は最初から性の規制を中心に青年期に注目していたのではないか”。たしかにエミールの記述は思春期以降に多くのスペースを費やしていますが、私が言いたかったのは、B.ロマンには幼少期の記述が殆どないこと、関心がもっぱら青年期に集中しているという特徴です。それに比べると、B.ロマンとしての『エミール』は異例です。そして、教育学で青年期と中等教育に関心が集まるのは、早くても19世紀末から、本格化するのはようやく1960年代以降のことでしょう。

3）“作品の表面の描写と特徴に目を奪われ、物語の深層構造に洞察の目が及んでいない”。これはその通りです。物語論をきちんと勉強しないと、B.ロマ

ンを解読できないことは痛感します。

4）“書き手の意図と、それがどう読まれたかは区別しないとB.ロマンの人間形成論的意味づけができないのではないか”。この疑問も「物語論」の必要性に絡みます。チボーデの『小説の読者』、バフチンの『作者と主人公』などを手がかりにして、B.ロマンの書き手と読み手の関係の文化史的考察を別の機会の課題にしたいと思います。

4　補論覚書　三つの視点

以上の他、私自身が補足説明する必要を感じたことをとりあえず三つだけ記します。

1）B.ロマンの文体と＜言葉＞の問題

かねてから私は、＜関係＞にこだわっているので、例えばordeal に現れる人間関係の諸相にはいつも注目してテクストを読みました。B.ロマンが「大人と子供の関係史」研究に、実りある素材と課題を提供してくれることはほぼ確信しているのですが、＜関係＞とセットになってテクスト解釈のキーワードとされる「言葉」の問題への目配りが効いていません。それが発表への前記のコメント3）、4）を招いた一因だと思います。物語論がロシアフォルマリズム以来の言語論的転回と共に浮上してきたテーマだからでしょう。

そういえば、批評家花田清輝は、「近代の確立していないところで、近代の超克を説くとは矛盾している」と言われた時代（1950年代）にあえて『近代の超克』という挑発的な評論集をだし、その扉のエピグラムに、ヴォーヴナルグの「ある思想が、単純な言葉で表現できないほど薄弱であるならば、それはその思想をしりぞけてよいことをしめす」という言葉を掲げています。けれど、この考え方は果たしてモダンなのかポストモダンなのか。というのも、言語以前の表象の重要性を指摘したのも、膨大な無意識の闇の世界と身体生命を強調したのもポストモダンです。これは、＜見えない世界＞を発見し、その記述化を図る、という、現代科学が自負する普遍的方法とどう関連するのでしょうか（松井，34）。

ちなみに、花田から半世紀後、いま一番根底的な現代批判を繰り広げていると私が思う小説家で批評家の高橋源一郎は、「人間の限界とは言葉の限界であり、それは文学の限界そのものなのだ」という、ロシアフォルマリズムの流れに属するクンデラの言葉を引用しています（高橋、xvii）。

2）B.ロマンの芸術家小説への変容―疎外された人間形成の反近代性

旧約聖書と様々な意味で対極的にあると言える『失われた時を求めて』も読み応えのある作品でした。その執拗なまでの心理描写は読み進めるには気力と体力を要します。それだけに、最終巻の表題「見出された時」をどう理解するかを巡る議論が忘れられません。語り手は、結局のところ、自分の生きてきた時間（経験）の意味を把握し損なっているのではないか、つまり「時」は見出されなかったのではないか、という意見が有力でした。

しかし、後で気が付いたのですが、プルーストが求めたのは、自己のアイデンティティーや人生の意味ではなく、人間の心のドラマを極限まで追求すること、より具体的に言えば、過ぎ去った自分自身の生の感覚そのものを文字言語によって記述・再現することであった。それゆえ、この作品を書いたこと自体が「見出された時」の達成と感じたに違いありません。これも、芸術至上主義の一種と言えます。『失われた時を求めて』は、18世紀、19世紀の、B.ロマンがアイデンティティーなるものを自明の前提とするか、少なくとも、アイデンティティーを探究することの意味の自明性を前提としたのとは、まったく次元が違う、というか、異質のモティーフによって書かれていることを意味するでしょう。

その背景、もしくは基盤には、19世紀末から20世紀にかけて、アイデンティティーの意味、書くことの意味、小説家の立ち位置をすっかり変えてしまう社会的・文化的変容があった。即ち、反もしくは非B.ロマンの時代となったということです。

学会発表ではその要旨のVにあるように、B.ロマンの「芸術家小説」への変容と教育学における教育目的論の挫折が対応するのではないか、という仮説めいたものを提起しました。変容を代表するのは、ジョイスの『若い芸術家の肖像』や、マンの『トニオ・クレエゲル』です。どちらも、青年期の生き方への問いの果てに、内なる魂の呼びかけに答えて、詩人として芸術に一生を捧げることを誓うところで結ばれます。言わば芸術家という「職業的Id.」獲得の物語です。深い洞察力をもって、ドイツ文学史を的確に要約したハインツは、文学・芸術がゲーテと

共に、キリスト教に代わる宗教となったと指摘します。そして、19世紀を経てそれが芸術至上主義への孤立の道をたどる、その末路にトーマス・マンを位置づけています（シュラッファー、89)。

芸術至上主義は「純芸術」と普通の市民生活との矛盾の現れです。シュラッファーの言い方を借りれば、「美神」への信仰告白は、普通の市民として生きることを断念することでもあります。そのような、非・反市民社会的人間の自己形成は、芸術に憧れる一部の青少年には魅惑的でしょうが、かつての「ピカレスク」以来のB.ロマンとは異なり、ふつうに市民社会を生きようとする、若者のマジョリティーのモデルにはなりえません。

このような変容の教育文化史的意味を問うことは、私の学会発表の主要な関心事でしたが、どれだけ受け止めてもらえたかわかりません。中条省平『反＝近代文学史』に言及して補論とします。

これは、明治以降の12人の小説家を「反＝近代」の主題に焦点づけて論じた作家論集です。夏目漱石を、「敗北する内面」と捉える第一章から始まって、泉鏡花の「内面を拒む神秘神学」、夢野久作の「自我なき迷宮の構造」、三島由紀夫の「＜外＞をめざす肉体」、村上龍の「反＝人間の想像的経験」などを論じて、筒井康隆の「消滅する人間、消滅する言葉」に至る。これはポストモダン文学論の典型の一つと言えます。そして、あとがきにこうあります。

「［漱石への批判は］私の考える「反＝近代」の意味を鮮明にするため、漱石の『こころ』を敵と見定めて、そこに出てくる人間のこころ（＝内面）の貧しさを見すえようと思ったのである。/人間のこころ(＝内面)のドラマを探究することが近代にふさわしい高度な文学性の証であるというのなら、私は近代文学にほとんど興味をもつことができないだろう」(中条，307)。

この見方は、かつての「内面への道」に対するゲーテの疑問に通じ、その後のB.ロマンの書き手の苦難に呼応します。これも、文学論の問題である以上に、教育学、とりわけ教育目的論の問題となるでしょう。

3）教育的価値　対　小説的価値（文学的・芸術的価値）

この主題こそ、前項と関連して、私の企図の中心にあったものですが、説明不足のため、残念ながら正面きったコメントをもらうことができませんでした。

これは、『悪霊』をアンチB.ロマン、と位置づけられるかどうかといったレベルを超える問題です。例えばジャン・ジュネの『泥棒日記』の評価をめぐってそれは典型的に表れます。同書の帯にある紹介文には、「裏切り、盗み、乞食、男色」の「壮麗な倒錯の世界」。「父なし子として生まれ、母にも捨てられ、泥棒をしながらヨーロッパ各地を放浪し、前半生をほとんど牢獄におくった」人間の自伝的作品、とあります。終身刑となるところをサルトルらの運動によって特赦を受けて作家の道を歩みます。

しかしこれは、元犯罪者の改悛の物語ではありません。市民道徳の常識より芸術的価値を上位に置く批評家たちさえその反社会性にはたじろぎました。たしかに文学の世界には『泥棒日記』の表現を許す自由があります。サルトルは分厚い『聖ジュネ』を書いてジュネを文学的に擁護しています。

それでもやはり、社会が、自らの存立根幹を揺るがす、「善悪の彼岸」の反社会性を肯定することはできないでしょう。同様に、教育学も、社会の＜正常な＞成員の形成を支える規範学である限り、規範の存在を否定できません。反社会的人間形成を主張するのは背理となります。たとえ現体制批判や、既成の規範批判の教育学はあっても、規範一般を全面的に否定する教育学はないでしょう。それはちょうど、社会の規範学である法学が、体制の如何を問わず、規範自体を否定すれば、自らの存立根拠を否定する矛盾に陥るのと同じです。

ところが、小説では、いや広く芸術では、社会の規範を超える、「善悪の彼岸」にある価値こそが礼賛されるのです。前にも言及した花田清輝は、「(芸術とは）日常性からの脱出と、善悪の彼岸への飛躍とをうながすなにものかである」(花田、112）と言い切ります。これは、花田のような前衛芸術の立場からの主張に限りません。例えば、大江健三郎のような良識に富んだ小説家も、次のように言います。

「小説は人間をその全体にわたって活性化させるための、言葉による仕掛けである」(大江、『小説の方法』11)。この定義のどこにも、社会の規範は在りません。

おわりに

本稿全体の最後に、研究ノートらしく、今後への

展望を開くきっかけとして、B.ロマンというジャンルが成立する精神史的契機を示唆する言説を三つ、西欧文化史研究の古典的文献から引用しておきます。

1）B.ロマンと「煉獄」思想の系譜の提示

アナール派の中世史家ル・ゴフは、『煉獄の誕生』において、こう語ります。

「古代末期から萌していた両教会(ラテンとギリシア）両世界間の不一致が、煉獄の歴史を西欧ラテン世界の問題に仕立てるのである」(ル・ゴフ、80）と前置きし、「ヘレニズムとキリスト教の間のある種の融合の坩堝であった」大港湾都市アレキサンドリアの二人のギリシア人神学者、クレメンスとオリゲネス（いずれも２世紀の人）を「煉獄の＜創設者＞」と見立てたうえで、「古代ギリシアに両者が負うていたのは、神々から加えられる懲罰が刑罰ではなく教育と救済の手段であり、浄化の一過程であるという思想である。プラトンは懲罰を神々の恩恵とみなした。クレメンスとオリゲネスはそこから、＜罰すること＞と＜しつけること＞とは同義であり、神々によるあらゆる懲罰が人間の救済に役立つという考えを引き出してくる」(80～81)。

天国か地獄、救済か処罰の二分法でなく、煉獄という第三の領域を設けることで、生前の罪ある者にも、死後、魂の浄化を通して救済の可能性がもう一度与えられることになったのです。これは聖書に根拠のある思想ではなかったけれども、ダンテの『神曲』の詩的表現において西欧における最終的勝利を収めた、とル・ゴフは見ています。

2）自己探求とは別の人間形成の在り方の示唆。

亡命のユダヤ人哲学者にして、ハイデガーへの根源的批判者カール・レーヴィットは、『ヘーゲルからニーチェへ―十九世紀思想における革命的断絶』において、ゲーテにこう語らせます。

「昔から私には＜汝自身を知れ＞といういかにももっともらしく聞こえる大げさな課題が、いつもいかがわしく思えて来たことを告白しなければなりません。なにか、司祭たちが極秘に集まって練った策略みたいです。果たすことのできない要求で人間たちをまどわし、人々を、外界に向かって行動させずに、偽りの内面的静かさへとかどわかそうとしているかのようです。しかし、人間というのは、世界を知る程度に応じて、自分を知るのです」(レーヴィット（上)、41)。

まさしく、内面への道に向かうロマン主義を不毛な思考として退け、外部に向かうことを勧めたゲーテらしい告白です。これは、厳密な意味でのB.ロマンが、古い共同体の人間関係の解体と、新しい市民社会の個の自立と連帯の希望が信じられた、歴史的瞬間にしか現れない、ユートピアのロマンであることを予言する言葉だったのでしょうか。B.ロマンの「人間像」を「自己形成と共同体の夢」という観点から解明しようとした池田浩士は、「教養小説は、本質的には、西暦1800年をはさむ前後わずか10年のあいだに、はじめて生まれ、そして最終的に死んでいたのである」(池田、222)と極言します。『ウィルヘルム・マイスターの徒弟時代』が刊行されたのは1796年のことでした。

とはいえ、その後、20世紀に入っても、マンの『魔の山』、ロマン・ロランの『ジャン・クリストフ』をはじめ、B.ロマン的小説は、書かれ、読まれ続けます。卑近な例では、最近の日本の、テレヴィの長編ドラマ、連続テレヴィ小説のテーマを眺めると、B.ロマン的でない作品を探すのに苦労するほどです。B.ロマンの挫折とB.ロマン的物語の蔓延の同時進行。この辺にも、人間形成をめぐる近代社会の矛盾が集約的に表れていると見ることができます。

3）世代継承と空間の同一性。

ミハイル・バフチンは、『小説の時空間（クロノトポス)』において、次のような問題提起をしています。

「幾世代にもわたる生の場の同一性は、個々の人物の一生涯の時間的境界、また一人の生涯のさまざまな段階のあいだの時間的境界［の作用］を弱め軽減することになる。場所が同一不変であるなら、揺籃と墓場も近接し一体化する（同じ片隅、同じ土地)。幼年期と老年期も近接化し一体化する（同じ木立、同じ小川、同じ菩提樹、同じ家)。同じ所で同じ条件のもとに暮らし同じものを見る相異なる世代の生活も、接近し一体化する。場所の同一性が規定する、あらゆる時間的境界のこの希薄化は、田園小説に特徴的なリズム、時間の循環するリズムをつくり出すのにも、決定的な影響をあたえる」(284)。

B.ロマンは、このような「場所の同一性」が失われていく歴史的段階における物語です。若者は、故郷を出て、放浪の旅に向かわなければなりません(例

えば“冬の旅”)。ウィルヘルムのように故郷に戻り、家族を成す者は例外的となっていきます。バフチンの指摘は、教養・文化の成立には、定住性のある共同体が不可欠であるという難問を示唆します。

B.ロマン研究は、教育学にとって、稔りをもたらす魅力ある課題ですので、誰か手掛ける人が現れることを願っています。

参考文献

バフチン，ミハイル、1975、北岡誠司訳、1987、『小説の時空間』新時代社

バフチン，ミハイル、1979、川端香男里他訳、1984、『叙事詩と小説』新時代社

バフチン，ミハイル、1979、斎藤俊雄・佐々木寛訳1987、『作者と主人公』新時代社

イーグルトン，テリー、1983、大橋洋一訳、1997、『文学とは何か―現代批評理論への招待』岩波書店

花田清輝、1959、『近代の超克』未来社

池田浩士、1979、『教養小説の崩壊』現代書館

伊藤　整、1957、『小説の方法』岩波文庫

レーヴィット，カール、1941、三島憲一訳、2015、『ヘーゲルからニーチェへ　十九世紀思想における革命的断絶』（上下）岩波文庫

Moretti, Franco, 2000 (First published in English 1987), The Way of the World—The Bildungsroman in European Culture (Translated by Albert Sbragia)

中条省平、2002、『反＝近代文学史』文藝春秋

中村光夫、1959、小説入門（新潮文庫）

大江健三郎、1978、『小説の方法』岩波同時代ライブラリー

シュラッファー，ハインツ、2002、和泉雅人・安川晴基訳、2008、『ドイツ文学の短い歴史』同学社

高橋源一郎、2002、『小説教室――億三千人のための』岩波新書

松井孝典、2017、『文明は＜見えない世界＞がつくる』岩波新書

（別表）

Bildungsromanを読む会の記録　I期　1978.6-1981.7

1　デフォー，D.　モル・フランダース
2　ケラー，G.　緑のハインリッヒ
3　スタンダール（ベール，H.）　アンリ・ブリュラールの生涯
4　ディケンズ，Ch.　大いなる遺産
5　ヘッセ，H.　デミアン
6　柏原兵三　ドイツ教養小説の系譜
7　小池　滋　イギリス ビルドゥングスロマン序説
8　川本静子　イギリス教養小説の系譜
9　ハーディー，T.　日陰者ジュード
10　ライト，R.　ブラック・ボーイ
11　徳富蘆花　思い出の記
12　中野孝次　麦熟るる日に
13　ゲーテ，J.W.　ウィルヘルム・マイスターの修業時代
14　登張正実　ドイツ教養小説の成立
15　池田浩士　教養小説の崩壊
16　ドストエフスキー，F.M.　悪霊
17　宮澤康人　京都コロキウム；Familie, Kindheit und Poesie
18　宮澤康人　ニューレフトの文化史・文化論
19　フィールディング，H.　トム・ジョーンズ
20　ハーディー，T.　テス
21　Hassan, I.H.　Idea of Adolescence
22　トウェイン，M.　ハックルベリーフィンの冒険
23　ジェームズ，H.　ディジー・ミラー
24　フィッジェラルド，F.S.K.　華麗なるギャッビー
25　サリンジャー，J.D.　ライ麦畑でつかまえて

物語を愉しむ会（旧 Bildungsromanを読む会　II期 1985～）の記録

1　マン，T.　魔の山（高橋義孝訳　新潮文庫）
2　ヘッセ，H.　ガラス玉演戯（高橋健二訳　新潮社）
3　ジッド，A.　一粒の麦もし死なずば(堀口大学訳　新潮文庫)
4　コクトー　恐るべき子供たち（鈴木力衛訳　岩波文庫）
5　ロレンス　息子と恋人（河出書房世界文学全集）
6　ジョイス　若い芸術家の肖像（丸谷才一訳　講談社文庫）
7　ミラー　南回帰線（河野一郎訳　講談社世界文学全集）
8　ヘミングウェイ　日はまた昇る（谷口陸男訳　岩波文庫）
9　ツルゲーネフ　父と子（金子幸彦訳　岩波文庫）
10　トルストイ　青年時代＋少年時代、幼年時代(原卓也訳　新潮文庫)
11　ディケンズ　デヴィド　コパフィールド（中野好夫訳　新潮文庫）
12　ブロンテ，C.　ジェーン・エア(大久保康雄訳　新潮文

庫)
13　スタンダール　赤と黒（桑原武夫・生島遼一訳　岩波文庫）
14　モーパッサン　女の一生（杉　捷夫訳　岩波文庫）
15　フローベール　感情教育（生島遼一訳　岩波文庫）
16　バルザック　ゴリオ爺さん（平岡篤頼訳　新潮文庫）
17　フローベール　ボヴァリー夫人（伊吹武彦訳　岩波文庫）
18　バルザック　谷間の百合（石井晴一訳　新潮文庫）
19　ダンテ　神曲（寿岳文章訳　集英社）
20　セルヴァンテス　ドン・キホーテ（永田寛定訳　岩波文庫）
21　シェークスピア　ハムレット（小田島雄志訳　白水社）
22　バニヤン　天路歴程（高村新一訳　山本書店）
23　ゲーテ　ファウスト（手塚富雄訳　中公文庫）
24　バフチン　ゲーテと教養小説（佐々木寛訳　新時代社）
25　ドストエフスキー　地下室の手記（江川　卓訳　新潮文庫）
26　ドストエフスキー　罪と罰（工藤精一郎訳　新潮文庫）
27　ドストエフスキー　未成年（米川正夫訳　岩波文庫）
28　ドストエフスキー　カラマーゾフの兄弟（原卓也訳　新潮文庫）
29　バフチン　ドストエフスキー論
30　ドストエフスキー　白痴（木村　浩訳　新潮文庫）
31　ラブレー　ガルガンチュアとパンタグリュエル（渡辺一夫訳）
32　バフチン　小説の時空間（北岡誠司訳　新時代社）
33　デュガール　チボー家の人々（山内義雄訳　白水社）
34　プルースト　失われた時を求めて（井上究一郎訳　ちくま文庫）
35　マン　トニオ・クレエゲル（実吉捷郎訳　岩波文庫）
36　マン　ベニスに死す（高橋義孝訳　新潮文庫）
37　マン　ブッテンブローグ家の人々（望月市恵訳　岩波文庫）
38　ジュネ　泥棒日記（朝吹三吉訳　新潮文庫）
39　ベンマン　石と笛　1（平井吉夫訳　河出書房）
40　アウグスチヌス　告白（山田　晶訳　中央公論社）
41　ゲーテ　詩と真実―わが生涯より（山崎章甫・河原忠彦訳）
42　ゲーテ　イタリア紀行（相良守峰訳　岩波文庫）
43　ゲーテ　ウィルヘルム・マイステルの遍歴時代（関　泰祐訳）
44　ゲーテ　親和力
45　ヘーゲル　精神現象学（長谷川　宏訳　作品社）
46　ジョイス　ユリシーズ（丸谷才一他訳）
47　メルヴィル　ピェール（坂下　昇訳　国書刊行会）
48　フォークナー　八月の光（加島祥造訳　新潮文庫）
49　フォークナー　響きと怒り（高橋正雄訳　講談社文芸文庫）
50　カポーティ　遠い声　遠い部屋（河野一郎訳　新潮文庫）
51　サリンジャー　フラニーとゾーイ（野崎孝訳　新潮文庫）＋大工よ屋根の梁を高く上げよ＋ シーモアー序章
52　ダウアー　敗北を抱きしめて（三浦陽一・高杉忠明訳）
53　旧約聖書　モーゼ５書（６書）
54　旧約聖書　士師記からヨブ記まで
55　新約聖書　４福音書＋使徒言行録
56　新約聖書　パウロ書～ヨハネ黙示録
57　カフカ　アメリカ（中井正文訳　角川文庫）
58　メルヴィル　白鯨（千石英世訳　講談社文芸文庫）
59　ジェインズ　双脳精神の成立（北村和夫訳）
60　スタインベック　怒りの葡萄（大久保康雄訳　新潮文庫）
61　フランクリン自伝（鶴見俊輔訳　旺文社）＋ロレンス　アメリカ古典文学研究
62　アーヴィング，J.　ガープの世界（筒井正明訳　新潮文庫）
63　コーラン（井筒俊彦訳　岩波文庫）
64　ブッダのことば（中村　元訳　岩波文庫）
65　リルケ　マルテの手記（大山定一訳　新潮文庫）
66　ルソー　エミール（今野一雄訳　岩波文庫）
67　ガルシア＝マルケス　百年の孤独（鼓　直訳　新潮社）
68　カフカ　城（前田敬作訳　新潮文庫）
69　カフカ　審判（本野享一訳　角川文庫）
70　ニーチェ　ツアラトゥーストラ　Ⅰ Ⅱ（手塚富雄訳）
71　ニーチェ　この人を見よ　・自伝集（川原栄峰訳　理想社）
72　空海：宮坂侑勝　空海密教の宇宙（大法輪閣）＋司馬遼太郎　空海の風景（新潮文庫）
73　ヘーゲル　歴史哲学講義（長谷川　宏訳　岩波文庫上下）
74　ブロンテ，E.　嵐が丘（河島弘美訳　岩波文庫）
75　論語（加地伸行訳　講談社）＋白川静　孔子伝（中公文庫）
76　老子　荘子（森　三樹三郎　老子・荘子　講談社学術文庫）
77　モーム，S.　人間の絆（中野好夫訳　新潮文庫）
78　ゴールディング，W.　蝿の王（平井正穂訳　新潮文庫）

79　ジェームズ，W.　宗教的経験の諸相（桝田啓三郎訳　岩波文庫）
80　加藤周一　日本文学史序説　上（ちくま学芸文庫）
81　古事記（福永武彦訳　河出文庫）
82　万葉集（中西　進全訳注　講談社文庫）
83　源氏物語（瀬戸内寂聴訳　講談社文庫）
84　平家物語（新潮古典叢書）
85　ホメロス　オデュッセイア（松平千秋訳　岩波文庫）
86　ヘシオドス　神統記（広川洋一訳）アポロドーロス　ギリシア神話（高津春繁訳）　エウリーピデース　バッカイ（逸見喜一郎訳）
87　加藤周一　日本文学史序説　下（ちくま学芸文庫）
88　井上ひさし　吉里吉里人（新朝文庫）
89　安岡章太郎　流離譚（講談社文芸文庫）
90　小林秀雄　本居宣長（新潮文庫）
91　大江健三郎　遅れてきた青年（新潮文庫）
92　大江健三郎　万延元年のフットボール（講談社文芸文庫）
93　大岡昇平　幼年　少年（新潮文庫）
94　イソップ寓話集（中務哲郎訳　岩波文庫）